

* 名胡桃城址（県指定史跡）

日本の歴史の流れを変える 大きなきっかけとなった山城



戦国時代、上杉謙信は三国峠を度々越えて上野に進攻し北条氏と戦火を交えました。

天正6年(1578年)に上杉謙信が亡くなると、甲斐の武田勝頼の命を受けた真田昌幸が吾妻・利根に進出し、名胡桃城を拠点とし対岸の明德寺城を攻略し、さらに沼田城を戦わずして調略します。その後も北条氏と真田氏は領地争いを繰り返していました。

秀吉が関白、太政大臣となっても北条氏は秀吉の上洛の要請に従わず沼田領を北条領としたいと条件を出したのです。

天正17年(1589年)7月豊臣秀吉はこれを裁定し赤谷川左岸を限って真田氏領と

し、それより東側を北条氏領としました。この裁定を不服とする北条氏方の沼田城代猪俣邦憲は、名胡桃城を不法攻略しました。

豊臣秀吉は天正14年(1586)に大名間の、私闘を禁じた「関東奥惣無事令」を出しており、その命令に反したと秀吉は激怒し、天正17年11月北条氏政・氏直に宣戦布告し、全国の大名に命じて小田原攻めを開始します。天正18年7月北条氏は秀吉に降伏し5代100年続いた北条氏は滅亡し、戦国時代に終止符をうちました。この小さな山城が日本の歴史の流れを変える大きなきっかけとなったのです。



住所：群馬県利根郡みなかみ町下津 3437

* 小川城址（町指定）

室町時代、利根郡一帯に勢力をもった沼田氏は一族や重臣を各地に配置した、小川氏、石倉氏、名胡桃氏等である。小川城は小川氏が築いたもので城には周囲を土塁で築きめぐらせたもので、本丸址には土塁を築くために組んだ石垣が現存しています。



小川城の最後の城主となった小川可遊齋は智略にすぐれ信州から上野(利根)に進攻してきた真田昌幸に加勢して名胡桃城を攻略し、更に昌幸が沼田城を戦わずして手中(調略)にしたことも可遊齋の大きな力とされています。

住所：群馬県利根郡みなかみ町月夜野 1125

* 矢瀬遺跡（国指定遺跡）

「四隅袖付炉」は全国でも矢瀬遺跡 だけといわれています。

縄文時代の後期から晩期にかけてのムラで、今から約 3000 年～2300 年前に存在した、祭祀を中心とした集落で、住居址、配石墓、水場、巨木の列柱が確認され、比較的小集団の集落で「四隅袖付炉」は全国でも矢瀬遺跡だけといわれています。

住所：群馬県利根郡みなかみ町月夜野
2939-1 外



* 如意寺にのこる上杉謙信供養塔

如意寺は旧・月夜野町上津にある曹洞宗の寺院。境内に一基の宝篋印塔(基礎の部分に当時のもの)があり、塔の基礎に刻まれている銘文に「造立石塔一基、奉為謙信法印」とあり、天正 6 年（1578）の干支も刻まれている。

上杉謙信は天文 21 年（1552）、はじめて三国峠を越え沼田城に迫りました。以来十数回にわたって関東に進攻し、約 20 年近く

上野、武蔵、下野等一帯を支配下におきます。天正 6 年（1578）、謙信が春日山城で亡くなると、沼田城代上野家成（うへのいえなり）は後閑の恕林寺（じょりんじ）に謙信の供養塔（宝篋印塔）を建てて越後に去ります。天正 8 年（1580）、恕林寺は戦火に焼かれ、後年供養塔は上津の如意寺に遷されています。戦火で焼けた恕林寺は後年沼田の材木町に舒林寺と文字を改めて再建されました。



住所：群馬県利根郡みなかみ町上津 2578

* 塩原太助

本所に過ぎたるものが二つあり 『津軽大名・炭屋塩原』



寛保3年(1743生)2月父塩原角右衛門、母とめの子として生まれ、幼名のころは彦七といい、宝暦11年(1761)太助19歳の時に三国街道の中山宿、横堀峠、伊香保、天神峠を通り榛名神社の御師(吉本坊)に世話になり路銀をもらい江戸に出ました。

当初日本橋伝馬町の味噌屋太郎兵衛、そして神田佐久間町(千代田区)薪炭問屋の山口屋善右衛門で22年間奉公をし、その間主人の許しを得て倉庫の掃除をして丹念に拾い集めた屑炭は、数百俵と言われ、給金は主人に預けやがて本所堅川相生町に独立し屑炭の量り売りを始め、それが元となり財をなしました。

当時の江戸の本所界限では「本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名・炭屋塩原」と言われるようになりました。

太助の残した公益事業は数多くあり各地に常夜燈等を立てるなど貢献しました。

文化13年8月14日74歳で没し浅草の東陽寺に葬られています。

* 三国街道

三国街道は三国峠を越えることから命名され、三国越え、三坂越えとも呼ばれています。

三国峠は群馬と新潟県境の峠、標高1,244mです。

高崎で中山道と別れ、上野(群馬)13宿、越後14宿で構成されています。

江戸幕府成立後江戸を中心とした防備体制を固めるために、東海道をはじめとした五街道が設置され、ついで三国街道が整備されました。

江戸時代以前は三国を越えて上野に入るとふくろ・相俣・湯ノ原・池の原を経た道でありました。

京都ではじまった応仁の乱で京都は戦乱の地となりました。戦乱を避けて地方に下った名ある文人、僧もこの三国峠を越えました。

戦国時代には越後の上杉謙信が三国峠を越えること14回に及んでいます。江戸時代には、参勤交代で長岡の牧野氏を始めとした越後の諸大名や、佐渡の金山の人夫として江戸の無宿が佐渡送りとなって、この峠を通りました。

明治維新の三国戦争では、会津兵と新政府軍となった上野・下野の藩兵が戦った場所で



もあります。明治になって信越線・上越線の開通により街道も峠も寂れてしまいました。

三国街道と宿場の成立期は宿場全般を記した史料がなく各宿場の成立事情や町立ての年代も異なります。

* 永井宿

三国街道上野 13 宿の最奥の宿場です。

標高 760 位の三国峠の斜面に宿が鍵型になっているのが特徴です。

元禄 2 年に問屋場が設置され、本陣・脇本陣・問屋・旅宿が 30 軒ほどありました。元禄 12 年、越後米の斗立場となり、米商が 7 軒もあり、宿の全盛期をむかえた時期でもあります。



幕末の万延元年の 1 月と 3 月の火災で宿はほとんど焼かれ、民宿はそれ以降に建てられました。

豪壮な建築の本陣があり、間口は 15 間半の平入切妻、板葺き 2 階建てで大きな建物でした。

明治維新の三国戦争では新政府軍の前線基地となった舞台でもあります。

* 猿ヶ京関所跡

三国街道北国の備えとしての猿ヶ京関所は、中山道の碓氷の関所と並んで幕府で重要視していた関所です。

寛永 8 年（1631）関所が設置され、関所役人 2 人（いずれも士分）足軽 12 人が配置され、猿ヶ京・相俣・吹路・永井の 4 ケ村より百姓が昼夜 6 人交代で勤めていました。

関所の開門時間は、朝 6 時から夕方 6 時でした。

武具として、弓 5 張・槍 5 筋・鉄砲 10 挺と三つ道具一組が備えてありました。

特に猿ヶ京関所は、非常に多くの手形が残されていました。昭和 26 年県の指定になっています。

